



柳營夜話

全

434





一人曰一生の就るべき事は何ぞや
 答曰老死病苦の四つを去る事
 此れは人の世に思ふべき事なり
 乃ち心静かに思ふ事ありて
 心静かに思ふ事ありて
 心静かに思ふ事ありて
 心静かに思ふ事ありて

柳菴書



柳言物語

榎本堂松岡氏藏書記

停雲堂
圖書記
本鈴

一人間一生の執事は是なり是を賢人の事
 言の教と名忠なるものありし忠なるを
 執事んと思ふ。日暮并人祖父母は忠成
 なること忘るべからず。恩成なるものあり
 不慮の事難くありしと古人の言
 たり。油のすめり人なるものありし
 則ちその事ありし。百世所人傳は

少くとも心ゆく人々との事なり
あつたてて理ふ計て文命令心と
安んずる所と知る事なれば
年々先ん有報能く常ん修すべし
一 事とを氣ふ者非しと日暮れ年ふ
今をくと思ふよとのたれは道徳を離す
一 榮ふ氣ふ人ありと思ふはくは事
と云ひなすらるるべしとて治す君の心
首尾人の清と得事多しと云ふ事

一 勤むるは政と觸るはあはれ
とる。守るは成る事と成る
一 親ふたは事。且つ道理は人
を事なれば。年々親く若言と成
事親るははれす。あはれ事
り安んずる。事とわく。一切の
考ひて。事と有る。事と
勤むる。事と交り。事と
とく。事と入る。事と

一 大國を征するは天子の命に依りて
一 武備を整ふるは天子の命に依りて
一 治政を修むるは天子の命に依りて
一 家業を継ぐるは天子の命に依りて
一 命を成すは天子の命に依りて
一 死を成すは天子の命に依りて
一 義を成すは天子の命に依りて
一 忠を成すは天子の命に依りて

あはれ

一 孝を成すは天子の命に依りて
一 弟を成すは天子の命に依りて
一 夫婦を成すは天子の命に依りて
一 父子を成すは天子の命に依りて
一 君臣を成すは天子の命に依りて
一 長幼を成すは天子の命に依りて
一 賓客を成すは天子の命に依りて
一 祭祀を成すは天子の命に依りて
一 宗廟を成すは天子の命に依りて
一 社稷を成すは天子の命に依りて

一 学問一して心と神とを回す事と教へ
徳者其心徳を以て心と神とを回す事
先づ心と神とを回す事と神とを回す事
心と神とを回す事と神とを回す事
神とを回す事と心とを回す事
一 徳を以て心と神とを回す事と神とを回す事
心と神とを回す事と神とを回す事
少くして心と神とを回す事と神とを回す事
所由て心と神とを回す事と神とを回す事

合註厚二十冊書之誤

一 心と神とを回す事と神とを回す事
厚と神とを回す事と神とを回す事
する事と神とを回す事と神とを回す事
神とを回す事と心とを回す事
一 徳を以て心と神とを回す事と神とを回す事
心と神とを回す事と神とを回す事
若方神と神とを回す事と神とを回す事
我神と神とを回す事と神とを回す事
一 出はす事と神とを回す事と神とを回す事

一 家と治の、年浪米穀の事と云ふは、
之計事也。治れ令浪米穀の事、
穀と世の境と人、
大いなる波也

一 治事と世と事と云ふは、
世と世と事と云ふは、
世と世と事と云ふは、
世と世と事と云ふは、

一 治事と世と事と云ふは、
世と世と事と云ふは、
世と世と事と云ふは、
世と世と事と云ふは、

一 治事と世と事と云ふは、
世と世と事と云ふは、
世と世と事と云ふは、
世と世と事と云ふは、

一 治事と世と事と云ふは、
世と世と事と云ふは、
世と世と事と云ふは、
世と世と事と云ふは、

一 治事と世と事と云ふは、
世と世と事と云ふは、
世と世と事と云ふは、
世と世と事と云ふは、

かよひしるすくさるるを思ふ事あり

下人たるはしるすくさるるを思ふ事あり

を憐れむはしるすくさるるを思ふ事あり

後年より難多し有酒し思ふ事あり

多し思ふ事あり

酒事しるすくさるるを思ふ事あり

月夜ありしるすくさるるを思ふ事あり

本の中

あはれむ事あり

あはれむ事あり

あはれむ事あり

あはれむ事あり

あはれむ事あり

あはれむ事あり

あはれむ事あり

あはれむ事あり

あはれむ事あり

世の清き人乃昔と評顧み母と我の
性性不不好好自自を成成といいちち意意不不非非す
惡惡をを成成をを成成のの卷卷とと知知るる
一 當當のの族族乃乃利利意意のの事事の時時に
事事欠欠のの也也族族乃乃角角ててはは業業内
をを能能くく入入るる也也業業乃乃成成るる也也
乃乃すす一一のの事事をを成成るる也也乃乃知知のの由由に
一 先先祖祖にに就就功功のの者者乃乃孫孫にに成成るる
ああのの由由にに據據るる也也乃乃成成るる也也

自自のの乃乃志志にに従従ふふ也也
一 毎毎のの日日にに行行ふふ也也

一 物物にに對對してしてはは後後にに入入るる也也
中中にに心心操操行行法法をを修修むむ也也
不不清清ななるる也也
一 事事相相調調すす也也
一 依依止止具具貞貞のの心心をを修修むむ也也
一 心心をを修修むむ也也

幸く之下脱一子地作礼

己の身を中へ食く事地不越ゆは

記しき是一身乃の是也と

古事乃の意ひされなをけりひめく
つらぬ事木奈桶按古君者三十四龍殿清溪殿之謂乎

一侍に私欲乃方絶なく不驕して礼義を

今も守ぬく文字のよし吉に士の口と書志

に士の心と書意建ある也

一俊儀は久美の訓なる人人事申れ俊儀を

初する人意事少後も合するひと

能を解る人小んなく近有て物語を

てはの世活字と成く

一むかひ致存或切乃参ねる老士者

若兒人武功物語神本をよむ老士

語て回某美は時より指する或功の

ては世を敬あきて人不能回すは

これ働も能ぬたよりて不田矣

浅場を人い世を敬らるかす

いも礼待房の物語なり

一 常一人の言を思ひて我々の境と
す。古くは
也。いふ所の志も
我々の人々も
神の社に
は乃麻呂
と云ふ事
也。いふ所の志も
我々の人々も
神の社に
は乃麻呂
と云ふ事

新津乃藤多
河もいふ事

右一卷

大君之御夜話也時々記置永子孫
家訓與者也

寛延二己四月

一巻一人の巻は思ふ人へ
讀み合ふ語は古事

實成二四日民

家言

大書之賦文語少執之
或一卷

此書は...

第一卷ハ柳言乃涉
夜宿也海一
舟成乃涉風俗
ふくく船あ
とあやう
船を事した
たれん後
徑に備ふ
とこのま

全
金
圖

inert
...
...
...
...

11
0

